人其ゆへをしらず。竊に聞、いにしへ鉄舟（てつしう）といへる大徳此寺に住たまひけるが、別に一室を此ところに構へ、手自雪炊の貧をたのしみ、客を謝してふかくかきこもりおはしけるも、蕉翁の句を聞ては泪うちこぼしつゝ、あなたうと忘機逃禅の郷を得たりとて、つねに口ずさみ給ひけるとぞ。其頃や蕉翁山城の東西に吟行して、清瀧（きよたき）の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐（あらし）山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に薫風万里の快哉を賦し、長嘯の古墳に寒夜独行の鉢たゝきを憐み、あるは蔦を着てたれ人いますとうちうめかれしより、きのふや鶴をぬすまれしと孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳ては、麻のたもとに暁天の霞をはらひ、白河（しらかは）の山越して、湖水一望のうちに杜甫（とほ）が眥を決、つひに辛崎（からさき）の松の朧とたるに一世の妙境を極め給ひけん。されば都径徊のたよりよけれとて、をり〳〵此岩阿に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢のあとなくなりたまひしのち、かの大徳ふかくなげきて、すなはち草堂を芭蕉庵（ばせをあん）と号、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨をよろこほひて亭に名いふなど、異くにゝもさるためし多かるほぞ。しかはあれど、此ところにて蕉翁の口号なりと世にきこゆるもあらず、ましてかい給へるものゝ筆のかたみだになければ、いちじるくあらそひはつべくも覚へね。住侶松宗師の曰、さりやうき我をさびしがらせよとわび申されたるかんこどりのおぼつかなきは、此山寺に入おはしてのすさみなるよし、此ころまで世にありし耆老のふみのみちにも心かしこきがものがたりし侍りし。されば露霜のきへやらぬ墨の色めでたく年月流去、水ぐきの跡などかのこらざるべき。さるを無功徳の宗風こゝろ猛く、不立字の見解まなこきらめき、仏経聖典もす

てゝ長物とす、いかでさばかりのものたくはへ蔵むべきなんと、いとさうぐ〳〵しき狂漢のために、いたづらに塵壷の底にくち、等閑に紙魚のやどりとほろびにけむ、びんなきわざなりなどかなしみ聞ゆ。よしやさは追ふべくもあらず、たゞかゝる勝地にかゝるたとき名ののこりたるを、あいなくうちすてをかんこと、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人々をかたらひ、かたのごとくの一草屋を再興して、ほとゝぎす待卯月のはじめ、をじか啼長月のすゑ、かならず此寺に会して翁の高風を仰ぐことゝはなりぬ。再興発起の魁首は、自在菴道立子なり。道立子の大祖父坦菴先生は、蕉翁のもろこしのふみ学びたまへりける師にておはしけるとぞ。されば道立子の今此挙にあづかり給ふも、大かたならぬすぐせのちぎりなりかし。

安永丙申五月望前二日　　平安　夜半亭蕪村慎記

降松（さがりまつ）〔一乗寺（じようじ）村の入口にあり、此名古し、太平記に出たり。又伝云、平敦盛（あつもり）に幼児あり、敦盛（あつもり）西海にて滅し後、其室此児を源家に隠さん便なふして、終に一条（でう）の降松（さがり）にといふは此所なりとぞ。洛陽一条に書したるは謬りならん。法然（はふね）上人叡山（えいざん）より賀茂（かも）社へ詣給ふとき、拾ひとりて養育し給ふといふは、此所をゆきゝし給ふ順路なりといふ〕

比良木杜（ひらきのもり）

〔降松（さがりまつ）の乾田間にあり。中に天王の小祠あり、氏神を勧請する所ならん〕